

## 八千里路雲和月

### —戦時下移動演劇隊の実態と表象—

楊 韜

怒髮冲冠、凭欄处、瀟瀟雨歇。抬望眼、仰天長嘯、壯懷激烈。三十功塵與土、八千里路雲和月。莫等閑、白了少年頭、空悲切。

靖康耻、犹未雪；臣子恨、何時滅。駕長車、踏破賀蘭山缺。壯志飢餐胡虜肉、笑談渴飲匈奴血。待從頭、收拾旧山河、朝天闕。

——岳飛『滿江紅』<sup>(1)</sup>

#### 一 はじめに

1940年代後半の中国、すなわち日中戦争期から国共内戦期にかけての中国における社会現象の一つに「人とメディアを巡る大移動」と言えよう。とりわけ、国統区（国民党勢力地区）、解放区（共産党勢力地区）、淪陷区（日本軍勢力・汪兆銘政権勢力の地区）、満洲国（日本軍勢力地区）、台湾（日本植民地）、香港（イギリス植民地）が同時に存在した日中戦争期の、中国の勢力図の多様さ・複雑さが注目に値するには言うまでもない。この時期のメディア・プロパガンダも相互に関連し、多様性に満ちたものであった。新聞・雑誌・漫画・ポスター・ビラなどの活字メディア、そして映画・舞踊・音楽・話劇などの身体的／視聴覚的メディアは、互いに織り重って影響し合っていた。このような交差するメディアが連動する社会において、

作家・ジャーナリスト・芸術家などの知識人／文化人が大移動していた。

以上のような歴史的背景を踏まえ、本稿では移動演劇隊を取り上げたい。移動演劇隊をめぐる人物や事象の特徴は、上述の歴史背景の要素のほとんどとかかわり、重層的に連動しているからだ。移動演劇隊を対象とする考察は、【戦時下中国の移動するメディア・プロパガンダ研究】の軸の一本となり得ると考える。しかし、移動演劇隊を研究の俎上に上げようとする、極めて難しい課題に直面する。すなわち、当時の移動演劇隊に関する状況は記録に残りにくいため、一次資料（とくに実際の上演の様子を記録したもの）がほとんどないことである。そこで、本稿では、考えられるアプローチとして、第一に実態調査（文献による調査及び照合）、第二に表象分析（当時の音声や映像メディアなどによる「再現」）、という二つの側面から移動演劇隊を考察したい。

1937年8月の第二次上海事変以降、多くの映画・話劇関係者らによって「上海戲劇界救亡協會」が立ち上げられた。その後組織された13の移動演劇隊は、上海を出発し、中国内陸の各地へ赴き、抗日救亡演劇活動を展開した。移動演劇隊については、すでに多くの研究がある。その代表的なものとして、呉若・賈亦棣（1985）、瀬戸宏（1990）、阪口直樹（1998）、Hung（1994）、邱冬媛（2003）が挙げられる。本稿ではまず、以上の先行研究を踏まえたうえで、抗敵演劇隊第一隊を具体例として取り上げ、一部新しい史料／資料を加えながら、その変遷（どのようなルートで移動したのか）・構成（どのような組織によって動員されたのか）・活動状況（どのように活動資金を捻出したのか）及び直面した諸問題について考察する。とりわけ、移動演劇隊の活動にどのような困難状況（脚本作り、舞台と装置、方言及び少数民族言語などに関して）があったのか、またそれ

に対してどのように工夫して対処したのかについて検証する。次に、映画『八千里路雲和月』を分析対象として取り上げ、映画では移動演劇隊の状況がどのように表象（「再現」）されているのか、及び観客の受け止め方について考察し、演劇隊員たちの戦中から戦後にかけての心境的变化にも注目する。最後に、映画のなかに映し出された人物像は同時期の知識人／文化人たちの運命とどのように重なっているのか、とりわけ、国共内戦末期における中国の知識人の「選択」への影響はどのようなものだったのかについての議論も視野に入れたい。

## 二 移動演劇隊の実態について

移動演劇隊の発端は、1937年に上海戲劇界救亡協會によって組織された13の救亡演劇隊である。1938年、武漢で政治部第三庁に所属する10の抗敵演劇隊へ再編された後、1941年、重慶で政治部に所属する6の抗敵演劇宣伝隊へと再々編成された。瀬戸宏は移動演劇隊の性格について、「抗日戦争期の国民党軍の宣伝活動を主要な任務として実際には共産党が指導した特殊な劇団である」<sup>(2)</sup>と総括する。演劇隊と中国共産党の関係については、解放後の共産党が出した「通達」からも確認できる<sup>(3)</sup>。

移動演劇隊の活動状況について、当時の新聞・雑誌の記事、及び関係者による回顧録に基づいて考察した研究は少なくない<sup>(4)</sup>。ここでは、抗敵演劇隊第一隊を事例にその一端を垣間見ることにした。抗敵演劇隊第一隊は元来上海業余実験話劇団を母体としているが、1937年に救亡演劇隊第三・四隊となった。その後、武漢での再編を経て抗敵演劇隊第一隊となり、1941年以降は抗敵演劇宣伝隊第四隊へと改名された。抗敵演劇隊第一隊の「前身」及び「後身」を含む一連の変遷を、メンバー・移動ルート・活動資金の三つの側面から整理すると、表1のように

まとめられる。

表1 抗敵演劇隊第一隊の変遷

	救亡演劇隊第三・四隊		抗敵演劇隊 第一隊	抗敵演劇宣 伝隊第四隊
	第三隊	第四隊		
隊長	鄭君里	陳鯉庭	徐韜	魏曼青
副隊長	徐韜	瞿白音	魏曼青	李超
隊員	趙丹、魏曼青、王為一、沙蒙、舒非（袁文殊）、顧而已、呂斑、葉露茜、朱今明、田蔚、伊明、趙曙、俞佩珊、沈曦、李森林、金乃華、海濤、黃晨ら	趙明、魏鶴齡、陶金、呂復、舒強、張客、嚴恭、吳曉邦、吳茵、范萊、李琳（孫維世）、趙慧深、吳湄、錢千里、田魯、吳衍、范迴（蘇丹）、鄭岩（東方）、錢風、張水華ら	陳元（孟啓予）、張客、舒模、李超、高博、蔣超、范萊、方平、陳守川、李森林、顧敏書、劉年、劉双楫、胡重華、趙戈今、江風、常青真ら	石炎、徐光珍、強明、張申怡、張貫球、趙光佩、盧小波、江青、葛文驊、張武、陳峰、鄒狄、葛敏、楊瑞庭、趙華、陳田頌ら
移動ルート	上海 ➡ 嘉興 ➡ 蘇州 ➡ 無錫 ➡ 常熟 ➡ 常州 ➡ 宜興 ➡ 鎮江 ➡ 南京 ➡ 蕪湖 ➡ 安慶 ➡ 九江 ➡ 武漢		武漢 ➡ 大冶 ➡ 長沙 ➡ 平江 ➡ 韶関 ➡ 柳州 ➡ 南寧 ➡ 衡陽 ➡ 長	柳州 ➡ 靖西 ➡ 龍州 ➡ 柳州 ➡ 桂林 ➡ 安順 ➡ 貴陽 ➡ 重慶 ➡ 武

		沙 ➡ 桂林 ➡ 柳州	漢 ➡ 長沙 ➡ 衡陽 ➡ 長沙 ➡ 武漢 ➡ 南 京 ➡ 杭州
活動 資金	個人の貯金、友人からの 借金、舞台収入	政治部第三 庁からの給 与（隊員は 月給25元、 隊長はそれ に15元増、 一チームの 運営費は400 元/月）	政治部第三 庁からの給 与、しかし 抗戦後期の インフレに よる影響（ 家計の圧迫 ）は顕著

出典：李超（1995）に基づき、筆者作成

当時の移動演劇隊の上演活動は、かつて上海で話劇活動を行ったような劇場ではなく、主に廟台・街頭・広場などで行われた（資料1、2、3参照）。それは、以下のような、当時の活動スローガンからも分かる。「従卡尔登到街頭！（カールトン劇場から街頭へ！）」、「到農村去！（農村へ行こう！）」、「到内地去！（内陸へ行こう！）」、「従劇場到廟台！（劇場から廟台へ！）」

資料1（場所不明、祠堂？伝統劇場？）



出所：『抗戦戯劇』第1巻第4期



資料2（街頭）



出所：『抗戦戯劇』第1巻第4期

資料3（廟台）



出所：『抗戦戯劇』第1巻第4期

ここでは、移動演劇隊が活動中に直面した困難を、脚本不足・舞台と装置・方言及び少数民族言語などの側面から見てみる。また、それに対してどのように工夫して対処したのかについても考察する。まず、「劇本荒」についてである。田漢は次のように述べている。

演劇運動が一時期極めて盛んになり、観衆は抗日戦争のため意気高揚した。内容が日本帝国主義打倒、漢奸打倒でさえあれば、舞台上で二言三言スローガンを叫ぶだけでも、終演後も盛大な歓声を沸き上がらせることができた。残念なことに、しばらくの間良い脚本がなく、皆陳劇で間に合わせるしかなかった。・・・欠点は少数の同志が演劇の果たす役割に疑念を抱いていることだった。脚本は乏しく、熱意は失せ、演劇運動の展望は見え、相当苦悶していたからであった。武漢に着いた後、チームから脱退した隊員も少なくなかった<sup>(5)</sup>。

このような問題を解決しようと、演劇隊員による脚本作りが始まった。「このように演目が豊富かつ多様で、形式も自由で活発な「晚会」は、その後我々が農村で活動する際にしばしば取り入れ、一つの上演形式となった。ともすれば、当時のその地域の状況と結び付けて突撃的に創作した「活報劇」もあった。このような「活報劇」の上演効果は正式発表などのような「講話」よりもずっと大きかった」<sup>(6)</sup>。

次に、舞台と装置をめぐる問題である。戦時下、空爆などで地方では設備が整った劇場が少なくなっていた。隊員たちはしばしば劇場の修繕にも取り組んだ。李超は当時の心情を次のように述べている。「曲江城には戦時に放棄された劇場があった



。我々は新大陸を発見したかのように、小躍りして喜んだ。改修を経て、我々が曲江でよく上演する会場となった」<sup>(7)</sup>。劇場の損壊が深刻であったのと同時に、音響設備などの舞台装置も極めて不足していたため、手作り作業や発明も日常茶飯事となった。舒模と李超はそれぞれ、次のように当時の状況を説明している。

当時、効果音を出す「効果方」どころが、拡声器もなかったため、全ての効果音は現場の人間で作り出すしかなかった。敵機の爆撃の音、戦闘機の音、爆弾の爆発音、塹の倒壊する音、屋根の崩れる音などまで、完全に人が道具を操作して作り出していた。一人が一種類を担当し、手順をよく把握し、かつ乱れてはならず、息がぴったり合っていなければならなかった。さもなければ、わざとらしくなり、真実味がなくなる<sup>(8)</sup>。

もっとも特徴的だったのは、29以上の創作脚本のほか、彼らが新しく発明した舞台装置であった。龐岳は数学と物理学の原理に基づいた舞台のワイヤーの牽引法を発明し、李超は加圧ランプと「ソファ箱」を発明した。戦地でかさばる道具を借りたり運んだりするのは容易ではなかったため、このように四つの木箱を作って一緒にすれば、一つのソファとなり、行軍する時には収納となり、経済的で便利というわけであった。このほか、竹の輪と布のロープで作った移動できる樹、戦地でも簡易に化粧品を作れる方法などもあった<sup>(9)</sup>。

さらに、奥地へ移動するにつれ、地方の方言及び少数民族言語に悩まされることも多くなった。演劇隊は上演を行う際、地元

地域の民衆の理解を得るため、積極的に現地の方が言われる隊員を起用し、親近感が出やすい舞台を演出した。たとえば、「草刈りをする人物は趙戈今が演じた。彼は湖北の生まれで、その生粋の湖北なまりは観衆に親しみを感じさせた」<sup>(10)</sup>。一方、少数民族の多い地区では、解説に手を貸してもらえる地元住民に助けを求め、観客に上演作品の内容を理解してもらえよう努力した。たとえば、「上演は祝日の獅子舞の形式で行われた。壮族の言葉は通じなかったため、朗読する台詞を書き出し、郷長や小学校の教師、或いは知識人に銅鑼を叩くのに合わせて台詞の解説を朗読してもらうしかなかった。こうしてどのあらすじも群衆が理解できるものになった」<sup>(11)</sup>。

### 三 移動演劇隊の表象について

#### (1) 『八千里路雲和月』の概説

戦後まもない1947年、移動演劇隊をテーマとする映画が相次いで製作された。たとえば、『八千里路雲和月』（1947）、『一江春水向東流』（1947）、『還郷日記』（1947）である。ここでは、映画『八千里路雲和月』を通して、表象された移動演劇隊をピックアップしたい。映画『八千里路雲和月』の概要は次のとおりである。

表2 映画『八千里路雲和月』の概要

中文タイトル	八千里路雲和月（別名：勝利前後）
英文タイトル	Eight Thousand Li of Cloud and Moon
製作	聯華影芸社
配給	崑崙影業公司
公開	1947年
言語	中国語（マンダリン）

上映時間	124分
監督	史東山
助監督	王為一
脚本	史東山
撮影	韓仲良
編集	邬廷芳
主な出演者	陶金、白楊、高正、石羽
主な上映場所	卡尔登（卡尔登大劇院=長江劇場）、 滬光（滬光大劇院=滬光電影院）、 皇后（皇后大劇院=和平電影院）

出所：筆者作成。

資料4 『申報』に掲載された『八千里路雲和月』の広告

今日榮譽獻映 卡爾登 滬光 皇后 兩院三場 九時半 五時半 二時半

較比一作衆觀片西好愛市全給薦推得值乘上上臻俱技演光聲  
！畫影浮的人藝浪流幅一！詩美讚的國中由自育一

黃吳史紅王高周石  
晨茵林櫻戎正峯羽  
(演主合聯)

金陶 楊白

醜接暴 疾民描 傑得瀝嘔  
態收露 苦間繪 構意血心

大導演 史東山

行萬里路 現身說法 喚醒國魂 受八年苦 敵愾同仇 萬衆一心

佳評一斑

「相信一兩年後中國的好電影，一定是從好電影中產生出來的。『八千里路雲和月』就是這樣一部好電影。」——鳳子

「我看了『八千里路雲和月』，覺得這是一部非常好的電影。它不僅在技術上，而且在內容上，都达到了很高的水平。」——仲良

「這是一部非常好的電影。它不僅在技術上，而且在內容上，都达到了很高的水平。」——仲良

「這是一部非常好的電影。它不僅在技術上，而且在內容上，都达到了很高的水平。」——仲良

出所：『申報』（1947年2月21日）

主演の白楊によると、製作機関（聯華影芸社）及び配給機関（崑崙影業公司）は、共産党によって設立された映画会社であった。「抗戦勝利後、周恩来の指導の下、陽翰笙・史東山・孟君謀らが上海崑崙影業公司の設立を計画した。最初に撮影したのは『八千里路雲和月』であり、その後『一江春水向東流』や『新閨怨』などを製作した」<sup>(12)</sup>。上海崑崙影業公司は共産党の上海の映画基地であった。国共内戦の勃発直前、周恩来は上海を離れた際、『八千里路雲和月』の撮影中の状況、及び『一江春水向東流』撮影開始の準備などについて白楊らから進捗報告を受けている<sup>(13)</sup>。上海崑崙影業公司の由来について、当時助監督を務めた王為一は次のように説明している。抗日戦争が終結すると、国民党政府は国営の映画製作会社を保有した。それまで映画製作会社を個人経営していた民間人も続けて経営することができたが、民間映画製作会社の新規設立は認可されなくなった。そこで、史東山、孟君謀らはかつてあった「聯華公司」の名義を使って聯華影芸社を立ち上げた。これは元「聯華公司」の継続という理由により、政府の認可が下りた。その後、聯華影芸社は『八千里路雲和月』を製作した。しばらく経つと、政策が緩和されて民間人も映画製作会社を設立できるようになったため、第2作目では「上海崑崙影業公司」という社名に改められた。王為一自身はこれをきっかけにして、映画監督となった。「上海崑崙影業公司は、共産党とは密接な関係にあった。当時社には、新人を育成する計画があり、抗日演劇隊で監督を務めた経験のある者は、助監督として入社することができた。徐濤や私などは皆育成対象だった」<sup>(14)</sup>。上海崑崙影業公司の経営は共産党とかかわりがあったのは事実だが、その資本および経営については詳しく知られていない。当時の新聞記事を確認すると、章乃器による投資も報じられたことがある。「抗戦以前から「七君子」の一人と称えられた章乃器氏は、戦中

、大後方で工業の発展に努力し、政治にはあまり関わらなかった。戦後は上海に戻り、続く内乱や深刻さを増す経済危機、活路が失くした産業を目の当たりにし、上海崑崙影業公司に大規模な投資をしたと聞く。映画『八千里路雲和月』はこの会社による製作であり、その経営状況は良好だった」<sup>(15)</sup>。章乃器は第三勢力として知られている知識人だが、上海崑崙影業公司に投資した事実についてはさらに検証する必要があるだろう。

## (2) 『八千里路雲和月』のあらすじ

長文となるが、程季華主編・森川和代編訳『中国映画史』（平凡社、1987、337-338頁）から引用して紹介する。

八・一三の全面的抗日戦が勃発すると、多くの情熱的な知識青年たちは、つぎつぎと暖かい家庭を捨て、学生生活を捨て、民族解放のために戦場へと向かった。上海の伯母の家に寄宿した大学に通っていた江玲玉（白楊）も、民族の義憤にかられて伯母や従兄の周家栄（高正）らのとめるのもきかず、救亡演劇隊に参加して遠征する。上海—南京間の鉄道にそって抗日救国の宣伝をして歩くうちに、彼女が音楽家の高礼彬（陶金）と知りあい、二人のあいだに愛情が生まれた。戦況の悪化にともなって演劇隊の仕事もますます緊迫し、徐州戦線では前線にまで入りこみ、難民を装って難関を突破したものの仲間に犠牲者も出る。こうして各地を巡り、武漢の守備戦や長沙会戦にも参加する。その間にあっても隊員たちは読書や研究会を持ち、お互いに励ましあった。玲玉と礼彬の愛も日増しに深まる。ますます苦しくなる環境や疲労、飢餓に打ち勝って長い月日ののち、やっと重慶に到着したとき、礼彬や隊員たちは疲労と栄養失調で倒れてしまう。

ちょうどその頃、玲玉の従兄の周家栄も重慶に来ていて、公務の名を借りて投機的な商売をしていた。周は玲玉を追い求め

金銭で誘惑したりするが、玲玉は拒否する。間もなく、日本の降伏、隊員たちの歓呼の声のなかで、玲玉と礼彬は結婚式をあげる。周家栄は接收官の資格で上海に戻り、玲玉たちも八年間の演劇隊を解散してやがて上海へ。しかし、そこで目にしたのは戦災地の惨憺たる光景と父の病死。二人は泊まるどころもなく、仕方なく伯母の家に行く。周家栄は敵産接收で大儲け、羽ぶりをきかしていた。

礼彬らは友人の夏光原（石羽）の世話で部屋を借りる、周家栄はまたしても玲玉をものにしようとして玲玉を怒らせる。礼彬は小学校の教師、玲玉は新聞記者の職にありついた。しかし物価の急騰で生活を維持することは難しく、そこへ長期の栄養失調と疲労がたたって礼彬が肺結核になった。しかも玲玉は妊娠していた。だが、生活のために仕事はやめられない。ある大雨の夜、周家栄の罪悪を暴露する記事を書こうと考えながら家路を急いでいた玲玉は、道ばたに昏倒する。いっぽう、玲玉の帰りがおそいのを心配して四方を捜す礼彬、彼といっしょになって捜すかつての演劇隊の友人たち。ラストシーンは、彼らが病院に収容された玲玉に会いにいくところで終わっている。



資料5 映画『八千里路雲和月』結末のシーン①

五十餘年來日本帝國主義者  
對中國欺壓侮辱,迫使中國發動  
了歷史上最偉大的八一三抗戰  
中國人民在這次抗戰中曾經表  
現了高度的愛國熱情  
這部影片所表演的僅是戲劇  
電影界一部份同志的史蹟而已。

資料6 映画『八千里路雲和月』結末のシーン②

這位文化戰士,在這樣的  
社會環境中,前途是死是活,  
請諸位賢明的觀眾自己去  
想,假如她的前途是死的那  
麼請反省一下——我們是否  
都有責任?

### (3) 上映後の評価

当時、上海の映画評論界で20～30人ほどの評論家が盛んに活動していた。『申報』副刊のほかに、『時報』の「電影時報」、『晨報』の「毎日電影」、『民報』の「電影与戲劇」、『中華日報』の「電影新地」など、多くの新聞紙面に映画評論のコラムがあった<sup>(16)</sup>。映画『八千里路雲和月』に関する評価について、一般観客と演劇隊関係者を分けてみてみよう。まず、一般観客からは次のようなコメントが寄せられている。

『八千里路雲和月』は、好と悪両方の事実を示してくれた。演出家は、登場人物に「善には善の報いがあり、悪には悪の報いがある」というような因果関係を押しつけてはいない。観客は、同情と憎悪がどう生まれてくるか考えつくだろうか。私の考えでは、汚職官吏や悪徳商人たちは江玲玉の従兄を賛美し、江玲玉夫婦を「馬鹿」だと嘲笑するだろう<sup>(17)</sup>。

この映画はドキュメンタリー性を帯びた芸術作品である。内容は面白く観客に単調さを感じさせない。そこには映画には整ったストーリーや波乱万丈で感動的なプロットもないが、作者の芸術的手腕によって生き生きとしたとても親しみを感じるものに仕上げられている。上映は、最後まで観客を引き込んだだけでなく、共鳴も呼び起こした。この映画は目下の優秀作品であり、歴史性に満ちたドキュメンタリーであるとも言える<sup>(18)</sup>。

この映画で描いた人物たちは一群の若い演劇従事者、文化人である。彼らは北京・上海から柳州・桂林へ、万里の遠征を果たした。八年間にわたり苦難の生活を経験した中国

民衆は数え切れないほど多いが、彼らはそのうちのほんの一部に過ぎない<sup>(19)</sup>。

次は、于伶と田漢のような演劇隊関係者から寄せられた意見である。

（于伶）私は、八年前に救亡演劇隊を組織し、たくさんの演劇隊を送りだした。この映画のなかの演劇隊のシーン（熱烈なシーン・喜びのシーンなど）を観るたびに、涙が出る。・・・（田漢）この映画で描いたのは決して虚構ではなく、演劇隊の日常茶飯事である。この映画に登場する演劇隊の生活の様子は第四隊・第九隊の事実に基づいている<sup>(20)</sup>。

上記のように、一般観客と演劇隊関係者はそれぞれ異なる立場からこの映画を観ている。一般観客の評価は主に映画の内容、とりわけどのように観る人を引き付けるかに集中しているようである。一方、演劇隊関係者は、やはり自らの体験と重なるシーンに注目し、ある意味では「懐かしい」気持ちで観ているように推測される。

#### （４）『八千里路雲和月』における可視化と既視感

多くの演劇隊関係者は、『八千里路雲和月』が彼らの戦時下の実体験をありのままに描き出していると言及している。上記の于伶と田漢の証言はその一部に過ぎない。ここでは、その原因と効果を可視化（ビジュアライゼーション）と既視感（デジャヴ）という視点から考えていきたい。実際には、表3が示すように、この映画に関わった監督や俳優の何人かは戦時下、演劇隊の活動にも参加し、実際に体験していた。

表3 映画『八千里路雲和月』の製作者・出演者について

	略歴	戦時下の活動（主要作品）	移動演劇隊経験
史東山	1902～1955、杭州生まれ。1931年、聯華影業公司に入社。	映画『青年進行曲』 映画『好丈夫』 映画『還我故郷』	
王為一	1912～2013、江蘇省呉県生まれ。	活報劇『為自由和平而戦』	救亡演劇隊第三隊隊員（1937）
白楊	1920～1996、湖南省汨羅県生まれ。聯華影業公司演員養成所出身。中国旅行劇団に参加し、1936年明星影片公司に入社。1937年以降、上海影人劇団に参加。	話劇『放下你的鞭子』 話劇『万世師表』 話劇『夜光杯』 映画『中華儿女』 映画『青年中国』	
陶金	1916～1986、蘇州生まれ。京華美專卒業。1934年冬、中国旅行劇団に参加。1936年、明星影片公司に入社、後に上海業余劇人協会実験劇団へ移る。	話劇『民族万歳』 話劇『最後の勝利』	救亡演劇隊第四隊隊員（1937）

出所：筆者作成。

臧克家は映画『八千里路雲和月』を観たあと、次のように述べている。

「救亡演劇隊第二隊」の白い旗やそれを囲んだ何十人かの青年男女が映しだされると、私の体はたちまちカールトン劇場の座席から抜け出て、銀幕のなかに入り込んでしまった。いや、入り込んだのは八年前の「文化工作団」チームのなかだ。私の心境もすぐさま何歳か若返り、胸を高鳴らせ、意気軒昂とした救亡の歌声を聞きながら涙を流しさえした。このような力強い胸の高鳴り、このような感動的な涙、見知らぬような、よく知っているような本当に興奮して幸福を感じる。ほとんど私は忘我の境地に浸り、無私無欲になっている。たまに自分が映画を観ているのだと気付く瞬間があると、本当にがっかりして悲しくなるのだった<sup>21)</sup>。

この映画のなかには、移動演劇隊のシンボルである旗・歌・地図・路線図などが何度も現れる。とりわけ、演劇隊の移動ルートは地図上に動態的に示され、その移動範囲の広さが表現されている。映画のなかでは、演劇隊の移動手段はおもに徒歩・車・汽車だったが、おおむね実際の移動手段と一致している。臧克家はさらに次のように述べている。

勿論、映画のなかの「救亡演劇隊第二隊」に、冼星海・金山・王莹・陳天国・・・の姿を見つけ出すことはできない。しかし、そこに抗戦初期の救亡青年たち一人一人の面影を見つけ出すことはできる。実際の戦場体験のない人からみれば、この映画は大げさだと感じるかもしれない。だが

、私からみれば、もっと「誇張」すれば、さらに真実の最高峰に達し、映画に潜む人を感動させる力をさらに大きくできただろう<sup>(22)</sup>。

この映画は、歴史的意義と現実的意義を一体化させたものである。厳粛で深い悲しみに溢れ、大いに考えさせられる作品である。このような戦時期の縮図を授けてくれた史東山氏に、感謝すべきだ。前線へ行ったことのない人たち、救亡運動に参加したことのない青年たち、どうかこの映画を観て八年間の空白を埋めてほしい。私自身は、この映画を観ると、過去に経験したことを生き直しているように感じる。戦地で出会った友人、悲惨だった過去の多くの出来事を思い出す。この小文を書いている今も、感情が高ぶり大波のように揺れている<sup>(23)</sup>。

身体的芸術（話劇、舞踊など）に対し、映画はそもそも記録媒体であり、異なる性質を持つ。演劇隊の活動実態を明らかにする検証にあたって、当時の舞台上演映像はもっとも有効である。しかし、すでに本稿の冒頭で述べたとおり、資料はほとんど残存していないという難題がある。このような困難を克服するため、「中継装置」としての映画や活字メディアを活用することが考えられる。臧克家のこの体験文から、映画で観た状況と彼の戦時下の体験は層をなすように重なっていることがわかる。このような映画による可視化と既視感的効果は、おそらく当時の多くの人々に浸透したものと思われる。演劇隊には、必ず上演すると言われた名劇「放下你的鞭子」があり、多くの歌謡曲も唄われていた。ここからは、これらについて、映画『八千里路雲和月』のなかでどのように再現されたのかを見てみたい。



## (5) 映画における劇や歌の再現

映画『八千里路雲和月』のなかで、戦中の「抗日」をテーマとする名劇「放下你的鞭子」、及び戦後の「民主自由」をテーマとする歌「你这个坏东西」は画竜点睛のような意味をもつ有名な部分である。以下、それぞれの内容を確認しながら、その特徴を分析したい。

## 「放下你的鞭子」の台詞の一部

中国語	日本語訳（筆者訳）
高粱叶子青又青 九月十八来了日本兵 先点火药库 后占北大营 杀人放火真是凶 杀人放火真是凶 中国军队有好几十万 恭恭敬敬让出了沈阳	高粱の葉が青い 9月18日に日本軍がやってきた 火薬倉庫を燃やし 北大営を占領 殺人放火し本当に凶暴 殺人放火し本当に凶暴 中国軍は数十万人だが 瀋陽を差し出した

「放下你的鞭子（鞭を捨てろ）」は「三江好」と「最後一計」と並んで、抗戦時期にもっとも上演回数が多かった劇である。内容は、東北から流亡してきた旅芸人の親子が路上で芸を披露する時に起こる出来事である。父親が娘を怒り、観客の目の前で鞭を打つ。すると、観客の中から一人の青年が現われ、「鞭を捨てろ」と批判する。すると、娘が父親の代わりに、日本軍が東北に侵略したせいで、このような悲惨な旅に出ざるを得なかったのだと説明し、日本軍の残暴を暴きだし、民衆に抗日に立ちあがるよう訴える<sup>(24)</sup>。「放下你的鞭子」に登場する青年は実際には観客を装った演劇隊員であるが、この劇が上演さ

れると、本当の観客たちも感化され、演じる者と観る者は一体となって舞台を盛り上げる。映画『八千里路雲和月』ではこのような一幕を生々しく演出している。

「你这个坏东西」の歌詞

中国語	日本語訳（筆者訳）
你！你！你！你这个坏东西！ 柴米油盐布天天贵 这都是你，都是你，囤积的好主意 只管你发财肥自己 别人的痛苦你是不管的 你这个坏东西！ 你这个坏东西！ 坏东西！坏东西！ 囤积居奇抬高物价 扰乱金融破坏抗战 都是你！ 你的罪名和汉奸一样的 别人在抗战里出钱又出力 只有你，整天的，在钱上打主意 想一想，你自己，死要钱作什么 到头来你一个钱也带不进棺材里 你这个坏东西！ 真是该枪毙！	あなたは悪者！ 米や油が毎日値上がり あなたが買いだめのせいだ 自分の儲けしか考えない 他人の苦痛はどうでもいい あなたは悪者！ あなたは悪者！ 悪者！悪者！ 買い占めて値をつり上げる 金融を妨害、抗戦を破壊 すべてあなただ あなたの罪は裏切り者と同じ みな抗戦で金も労力も捧げた あなただけ、毎日儲けること しか考えず そんなに金がほしいか 死んだら一銭も持っていけない あなたは悪者！ 銃殺してしまえ！ あなたは悪者！ 銃殺してしまえ！

唉！你这个坏东西 唉！真是该枪毙！	
----------------------	--

「你这个坏东西」は舒模の作品である。彼の最も特色ある代表作は1940年代に作られているが、それらの作品は社会の暗黒面を暴き出している。国民党反動派を糾弾する『走私的人』、『你这个坏东西』および『跌倒算什么』、『黄魚滿天飛』など……腐敗現象も舒模の怒りを引き起こし、創作にかき立てたと言われている。陳志昂によると、この歌は以下のような経緯で創作された。ある日、彼は桂林で貧困と病魔に苛まれた友人を見舞いに行ったあと、軍官と富裕商人たちが遊興にふける樂群社の前を通りかかった。中からは「ブンチャッチャ」という樂舞の音とともに楽しそうな歌や談笑が聞こえてくる。舒模はこうした亦官亦商の奴らが国難に乗じて金儲けをする罪を犯していると考え、思わず心中に激しい怒りが燃え盛り、すぐさま義憤に満ちた厳しい叱責の歌を作った。その歌は人民の胸の内を歌って大いに人気を集め、間もなく国統区全域に広まった。この曲は古代雅楽の七声徴調に似た音階を採用しているが、曲調は民謡風で、かつ「数板」「垛板」など民族音楽的なリズムを用いて、非難と告発のムードを際立たせている。同時に作曲技法では主調とその進行、緊張、反行、借用などの手法を利用し、単純な中に変化を求め、表現力を豊かにした<sup>(25)</sup>。

抗日戦争勝利後、演劇隊の活動は徐々に戦後の民主運動や社会現実を反映する作品を上演するものへと変わった。当時、演劇隊がもたらした社会的影響は、主に芸術活動を通して現れたが、なかには歌というものも大きな割合を占めていた。田稼は次のように指摘している。「たとえば進歩的な歌曲を例にすると、抗戦初期の救亡歌曲はともかく、抗戦後期に現われた民主運動を反映する『茶館小調』・『你这个坏东西』・『大家唱』

などの創作及び広げ、みなほぼ演劇隊との関連がある」<sup>(26)</sup>。上記の舒模の作品のような諷刺歌曲について、史書園は次のように分析している。諷刺歌曲の最も主要な芸術的特色は、民族音楽の継承と発展である。一方で、作曲家たちが創作に用いる素材の多くは当時の現実社会に由来していて、音楽の創作もまた民間音楽の影響を強く受けている。他方では、民間音楽の形式を採用すると大衆から受け入れられやすく、宣伝が有利に運ぶ。歌曲は多くの民謡や劇音楽のリズムと旋律の特色を参照した。舒模の『你这个坏东西』の第二部分は、劇音楽の節回しの中の蹀板の応用に成功した。リズムは明確であり、極めて短い句式を組み合わせて、一種の糾弾のニュアンスを表している<sup>(27)</sup>。

#### 四 結びに：移動演劇隊の実態と表象から考える戦時下と戦後初期の知識人

映画『八千里路雲和月』の公開後、多くの評論が出た。そのなかでは、「方正」と名乗る人物の文章では、当時の知識人層が抱いていた共通の疑問について取り上げられている。以下、抜粋で紹介する。

『八千里路雲和月』は戦後中国映画界の稀に見る優秀作品に違いないだろう。この作品は現実性と啓発性に富んだものである。作品のなかで示されているのは、救亡演劇の作り手たちの運命だけではなく、当然数人の青年男女の運命だけでもない、中国中のミドルクラスの知識人たちに共通した運命である。・・・この映画の最後には、銀幕に大きな疑問符が映しだされる。この疑問符は、非常によい問いを我々に投げかけていた。「ミドルクラスの知識人たちは

このような境遇にあったら、どこに行こうとするだろう？」・・・一部の人は、中国無産階級的政治力—中国共産党—に対してある程度幻想を抱いているだろう。しかし、理論上にせよ事実上にせよ、中国共産党の勝利はミドルクラスの知識人により大きな災難と破壊をもたらすこととなる。なぜなら、根本的には中国共産党はミドルクラスの知識人を敵と考えるからだ。ロシア革命以後のミドルクラスが受けた苦しみや打撃、ボルシェビキとなったウラジーミル・マヤコフスキーですら自殺に追い込まれたことが、そのよい証拠である<sup>(28)</sup>。

方正のこの評論は、当時の知識人たちの複雑な心境を代弁しているようにも思われる。映画のなかに映し出された人物像は同時期の知識人たちの運命と重なっている部分が多いからだ<sup>(29)</sup>。映画のなかに登場した江玲玉と高礼彬のような「知識青年」たちは、大都市上海を出発し、内陸部の武漢、重慶、桂林などを転々とした。八年間にわたる長期の大移動は彼らを鍛え、やがて彼らは「戦争を知る知識人」となり戦後は、この自負とともに上海に戻った。彼らは上海を離れた当初、高揚する愛国主義に刺激され、「文化戦士」となろうと燃えていた。その後は、移動の途中に様々な困難に直面したが、勝利への希望を頼みに長期であろうとひたすら耐えた。そして、日本に対する勝利を収め、ようやく「凱旋」を果たした（このとき、戦時中にグレーゾーンとなった「上海」に留まった文化人への勝者意識もあったものと推測される）。しかし、上海に戻った彼らが目にしたのは、国民党政府の「接收」に伴う不正・汚職の社会であった。彼らは、これまでの希望を失くしただけでなく、戦後社会の厳しい現実にも直面せざるを得なかった。このような境地に立たされた知識人たちは、自分がこれからどの方向へ向かっ

て歩むべきかと再び苦悩に陥るようになった。

上海、重慶、延安、香港などは、地理的な目標だったというよりも、彼らにとってはむしろ自己主体性の転換点であった。彼らは、これから自分の歩むべき方向にかかわる決断に迫られる時期を迎えた。時局の変化に伴い、1949年前後、知識人たちの再移動が始まった。国民党政権とともに台湾へ渡った人々、新しい共産党政権への期待を抱いて大陸に止まる人々、共産主義を恐れて香港やアメリカなどへ移した人々、様々である。この移動の規模は、1937年夏以降の移動にも劣らないうえ、その後の1950年代における中華圏の文化／芸術の勢力図の分化・再編にも密接に関わるものであり、戦後の歴史においても大きな動きであると言えよう。

**付記：**本稿は、科学研究費【基盤研究（B）『戦時下中国の移動するメディア・プロパガンダ』（課題番号：24320038）】研究分担金の交付を受けて行った研究成果の一部である。

〈注釈〉

- (1) 『満江紅』は岳飛の作品として名高いが、この宋词は岳飛ではなく、明の時代の人によって創られたという説もある。しかし、作品のなかで謳える愛国精神、とりわけ侵略を受けた国民の愛国抗戦の意志が鮮明であることには変わりない。夏承燾（1962）参照。
- (2) 瀬戸宏（1990）、413頁。



- (3) 1983年5月26日の「关于确定党的秘密外围组织，进步团体及三联书店成员参加革命工作时间的通知 中共中央组织部 组通字83（34）号」に、「救亡演劇隊、抗敵演劇隊、抗敵宣傳隊、新中国劇社、上海労働婦女戦地服務団は抗戦時期我が党が国民党統治地区において直接指導した進歩的団体である」と明記されている。生活・読書・新知三聯書店文献史料集編委会編『生活・読書・新知三聯書店文献史料集』（北京三聯書店、2004）、44頁。
- (4) とくに、「演劇九隊」について詳細な考察を行った瀬戸宏（1990）、及び「西南劇展」における演劇隊の活動について論じた阪口直樹（1998）の二篇を参照されたい。
- (5) 田漢、1986、18頁。
- (6) 舒模、1985、246頁。
- (7) 李超、1995、48頁。
- (8) 舒模、1985、269頁。
- (9) 李超、1995、141頁。
- (10) 李超、1995、27頁。
- (11) 李超、1995、73頁。
- (12) 白楊、1996、164 - 165頁。
- (13) 白楊、1996、136頁、147頁。
- (14) 李鎮（2009）における王維一の証言を参照。
- (15) 「章乃器投資電影」『快活林』第55期、1947年。
- (16) 陽翰笙、1989、555頁。
- (17) 管玉「同情與憎恨 看「八千里路雲和月」」『申報』1947年2月9日。
- (18) 林童「談談「八千里路雲和月」」『半月新聞』第3期、1947。
- (19) 東方曙「影評 八千里路雲和月」『星期電影』第12期、1947。

- (20) 「開麥拉下的演劇隊—「八千里路雲和月」集評」『軍中娛樂』第2・3期、1947。
- (21) 『臧克家全集』第12卷、18頁。
- (22) 『臧克家全集』第12卷、19頁。
- (23) 『臧克家全集』第12卷、21頁。
- (24) 「放下你的鞭子」の創作・上演については、Hung (1994) の第2章を参照されたい。
- (25) 陳志昂、2005、251-252頁。なお、ここの徵～変徵というのは旋法の構成音を指す（ド、レ、ミのようなもの）。七声徵調というのは文字通り七音で構成されるが、ここでは七音のはずなのに六音しか書かれていない。本来は上記六音に「宮」が加わり七音となる。それが本文のミスなのか、この曲では七声徵調のうち六音しか使われていないという意味なのかは、この引用文のみでは判断できない。また、「数板」と「垛板」はいずれも中国の戯曲音楽のリズム形式である。
- (26) 田稼、1985、235頁。
- (27) 史書園、2009を参照。
- (28) 方正「从「八千里路雲和月」看一個問題」、『中堅』第3卷第5期、1947。原文での「玛耶阔夫斯基」、すなわち、「马雅可夫斯基」であり、ウラジーミル・マヤコフスキーとのこと。
- (29) 方正の文章に対して、馬高による「八千里路雲和月」の映画評論（『申報』1947年2月17日）は、知識人自身の「脆弱性」や時代に対する「敏感性」の視点からこの映画を論じている。

文献一覽

< 中国語 >

白楊『我的影劇生涯』（中国電影出版社、1996）

陳多緋編『中国電影文献史料選編・電影評論卷1921～1949』（中国電影出版社、2014）

陳偉華『中国現代電影与文学之關聯研究：以歷史与比較的視角』（中国青年出版社、2012）

陳子善主編『中国現代文学編年史：以文学廣告為中心・1937-1949』（北京大学出版社、2013）

陳志昂『抗戰音樂史』（黄河出版社、2005）

丁丁「在太行山里：抗敵演劇第二隊工作回憶片断」中国話劇運動五十年史料集編輯委員會編『中国話劇運動五十年史料集 第二輯』（中国戲劇出版社、1985）

段從学『「文協」与抗戰時期文芸運動』（北京大学出版社、2012）

傅学敏『1937-1945：国家意識形態与国統区戲劇運動』（中国社会科学出版社、2010）

葛一虹主編『中国話劇通史』（文化芸術出版社、1990）

集思「回憶演劇五、七隊在広州的日子」中国話劇運動五十年史料集編輯委員會編『中国話劇運動五十年史料集 第三輯』（中国戲劇出版社、1985）

李建平『桂林抗戰文芸概観』（漓江出版社、1991）

李超『硝煙劇魂：抗敵演劇一隊回憶錄』（中国廣播電視出版社、1995）

李鎮「王維一訪談錄」『当代電影』2009年第2期

劉平『中国話劇百年図文志』（武漢出版社、2007）

劉斐章・王林「歲月：讓我們無法忘懷：演劇八隊在湖南的抗日宣傳活動」『芸海』2005年第4期

- 劉斐章「演劇六隊簡述」中国話劇運動五十年史料集編輯委員会編『中国話劇運動五十年史料集 第三輯』（中国戲劇出版社、1985）
- 呂復・趙明「演劇九隊十一年」中国話劇運動五十年史料集編輯委員会編『中国話劇運動五十年史料集 第二輯』（中国戲劇出版社、1985）
- 邱冬媛「抗戰時期的抗敵演劇隊之研究」『台灣國防大學復興崗學報』78期、265-286頁、2003
- 上海圖書館『中国近現代話劇圖志』（上海科學技術文獻出版社、2008）
- 邵迎建『抗日戰爭時期上海話劇人訪談錄』（台北秀威資訊、2011）——『上海抗日時期的話劇』（北京大學出版社、2011）
- 石曼『重慶抗戰劇壇紀事』（中国戲劇出版社、1995）
- 史莽「抗日戰爭中的一支文芸輕騎隊：回憶抗敵演劇四隊」『新文學史料』1987年第2期
- 史書園「20世紀40年代國統區的風刺歌曲創作研究」『寧夏大學學報（人文社會科學版）』第31卷第5期、2009年
- 舒模「演劇隊的生活回憶」中国話劇運動五十年史料集編輯委員会編『中国話劇運動五十年史料集 第二輯』（中国戲劇出版社、1985）
- 宋寶珍『中国話劇史』（北京三聯書店、2013）
- 孫犁「民族革命戰爭與戲劇」『孫犁全集』（人民文學出版社、2004）
- 孫曉芬『抗日戰爭時期的四川話劇運動』（四川大學出版社、1989）
- 田本相・石曼・張志強『抗戰戲劇』（河南大學出版社、2005）——『中国話劇百年圖史 上・下』（山西教育出版社、2006）
- 田漢『抗戰與戲劇』（商務印書館、1937）——「抗敵演劇隊的組成及其工作」『戲劇春秋』第2卷第2期（1942）

——『田漢文集』第15卷（中国戲劇出版社、1983）

田稼「試述演劇隊的發展經過及其特点」中国話劇運動五十年史料集  
編輯委員会編『中国話劇運動五十年史料集 第一輯』（中国戲劇出版社、1985）

夏承燾「岳飛[滿江紅]詞考辨」『中國文學報』16、56-63頁、1962

陽翰笙『陽翰笙選集・第四卷』（四川文芸出版社、1989）

顏一煙「在救亡演劇二隊的日子里」中国話劇運動五十年史料集編輯  
委員会編『中国話劇運動五十年史料集 第三輯』（中国戲劇出版社、1985）

——「憶上海救亡演劇第二隊」『新文化史料』1994年第4期

王仕琪「抗戰時期活躍在湖南的抗敵演劇隊」『檔案時空』2012年第5期

王莹「我们可以放心了」、『抗戰（三日刊）』第18号、1937年10月16日

吳若・賈亦棣『中国話劇史』（行政院文化建設委員會、1985）

臧克家「从銀幕看到了我自己一看『八千里路雲和月』抒感」『臧克家全集』第12卷（時代文芸出版社、2002）<初出は1947年2月10日『文匯報』>

<日本語>

間ふさ子『中国南方話劇運動研究（1889-1949）』（九州大学出版会、2010）

阿部幸夫『幻の重慶二流堂：日中戦争下の芸術家群像』（東方書店、2012）

阪口直樹「「国統区」文化活動における「西南劇展」の位置」『言語文化』1（1）、47-69頁、1998

瀬戸宏「演劇隊について—演劇九隊を中心に—」『樋口進先生古稀記念 中国現代文学論集』（中国書店、1990）

——『中国演劇の二十世紀：中国話劇史概況』（東方書店、1999）

< 英語 >

Hung, Chang-tai *War and Popular Culture: Resistance in Modern China, 1937-1945*. (University of California Press, 1994)

Leyda, Jay. *Dianying: An Account of Films and the Film Audience in China*. (MIT Press, 1972)

< 史料 >

『抗戰（三日刊）』（1937～1938）

『光明』第3卷第3期（1937）

『訊報週刊』1-26期（1938）

『抗戰戲劇』第1卷（1938年）

『戲劇春秋』第2卷（1942年）

『申報』（1947年2月分）